

# 講義 源氏と源氏以後

—— 第二講・紫式部と孝標女の距離 ——

## 第一講 「文学」と「効用」の問題

口上

- 一 孝標女における「影響」のかたち
- 二 「文学」における「効用」の問題
- 三 『源氏物語』の「効用」（以上、本誌第82号）

「源氏以後」という場において、菅原孝標女が主要人物 key person のひとりであることはいうまでもあるまい。第一講でも述べたように、物語作家としても、個人としても、単に一方から他方への影響といった平面的な関係だけでなく、深い関連があった。

## 横 井 孝

今回もひきつづき、この孝標女をめぐる「源氏と源氏以後」という状況について講義してゆきたい。

### 一 平安中期女性作家関係系図

人と人の関連を調べる第一歩として、系図をつくってみることは、不可欠の作業である。史料操作を加えなければならぬ場合などはやや面倒ではあるが、その結果、思わぬ人物同士が鉢合わせをしたり、ちいさな発見があったりして、なかなか楽しい仕事である。その一端として、菅原孝標の周辺を「嵯峨」とのかかわりで一望したことで、「ちいさな発見」とおぼしきものを眺めたことがあった。

こころみに、平安中期の文学史をいろいろる女性作家を系



線でないでみると、主要な人物たちが、案外簡単にひとつの系図におさまることがわかる（前頁「系図1」参照）。

これは、むりやりひとつの系図にまとめたわけでないことは、周辺の人物を省略して単純化してみれば納得できるはずである。つまり、当時の貴族社会のなかでは交流圏が限定され、かなり狭隘であったことによるものなのである。

また、文学史に限らず、当時の国家を揺るがす歴史的事件の身近なところに有名な作家があったりする。

——たとえば、『紫式部集』冒頭部（15～19番歌）で式部と贈答をくり返しながら西国に下っていった某女は肥前守の娘で、その肥前守は平維時だ<sup>(2)</sup>という。その維時の嫡男・直方は長元元年（一〇二八）の平忠常の乱の際の追討使に任せられ、さらに翌年、支援策として父・維時も上総介に任せられ、ともに歴史の表舞台に登場しているのである。ただ、乱の鎮定に手こずって官符発給を要請したものの却下され、長元三年（一〇三〇）七月、直方の召還が決定している<sup>(3)</sup>。

結果として、ことは不首尾だったとしても、追討使に選任されるような武勇の家として評価されていたのが維時・直方の一族なのであり、追討使の支援であったとしても維時が国司に任せられるなど、中央政府の要人に彼らの名が知られていたと推察できる。

『紫式部集』の、これも冒頭ちかく、2番歌に、

その人とをきところへいくなりけり。

あきのはつる日きたるあかつき、むし

のこゑあはれなり

2 なきよはるまがきのむしもとめがたき

あきのわかれやかなしかるらむ<sup>(4)</sup>

とあるのは1番の「わらはともだち」に対応する詞書であり、これが15～19番の肥前守の娘と同一か否か議論はあるが、清水好子は2番歌からうかがえる背景として、つぎのように言及している。

友だちは久しぶりに都に帰ったのに、また遠い国に、たぶん父に伴われて任国に下るのであろう。……当時受領になると莫大な富を蓄えることができたというが、この人のように浪人するひまなどなく、帰京するなり次の任地がきまつて下向できるのは、よほど有力者のお覚えがめでたい人なのだろう。一家の空気が自信と活気に充ちている様が彷彿とする<sup>(5)</sup>。

これを平忠常の乱前後の状況を鑑み、平維時一家の像と重ね合わせれば、なかなか鋭い指摘だったのではないかなどと思えてもくる。もちろん行文からは、清水が乱をめぐる右記のあれこれを意識していたか否か、おそらく意識にはなかつたであろうが。

『尊卑分脈』からは、維時が祖父・貞盛の養子となつて  
いること、貞盛の弟繁盛の孫・維茂（これもち）（維良）も養子に迎え  
られていること、さらに彼らが諸国の受領を歴任している  
ことが読みとれる。維茂などは鎮守府將軍に任ぜられたあ  
と、重任の運動のために莫大な財物を道長に贈るほど富裕  
であつたことが知られる。<sup>6</sup>直方が忠常追討に手間取つたこ  
とも、実は「貞盛・繁盛流が国司を務め、追討を長期化す  
るのは、彼らの利権獲得という要素もあつた」とも指摘さ  
れている。平維将・維時らの裕福さが類推できよう。清水  
好子の思惑とは別に、「肥前守が維時であるならば、「一家  
の空気が自信と活気に充ちている」というのも納得できる  
かもしれないのだ。

なお、平忠常の乱の直後の長元五年（一〇三二）に常陸  
介に任ぜられた菅原孝標の果たした役割については、すで  
に分析したところである。<sup>8</sup>さらに、この後に蛇足を加える  
ならば、直方の娘は源頼義に嫁し、八幡太郎義家らをもう  
け、河内源氏の嫡流を継いでいる。

## 二 関係系図を読む

さて、系図に話頭をもどそう。

『蜻蛉』『枕』『源氏』『更級』の作者という、平安中期を

いろどる作家が至近距離にあつて、「影響」あるいは「受容」  
という名の連環を有していた、という事実がここに端的に  
あらわされているわけである。

『源氏物語』紅葉賀の巻なかばの挿話、源典侍との逢瀬  
の際の源氏の歌、

さ、わけば人やとがめむいつとなくこまなづくめるも  
りのこがくれ  
（二五五頁）

が『蜻蛉日記』下巻末ちかくの、

篋分けばあれこそまめ草枯れの駒なづくめるもりの  
こがくれ

を引歌とすることは、すでに『花鳥余情』ほかの古注に指  
摘がある。

紫式部の作品のなかに『蜻蛉』を見いだす論は、古くは  
岡一男『源氏物語の基礎的研究』（東京堂出版、一九五四  
年一月刊）や木村正中の論<sup>9</sup>があり、そののち上村悦子が「紫  
の上や六条御息所、明石君などの造型に道綱母を参考にし  
た<sup>10</sup>」といい、坂本共展（ともひ）は紫式部が『蜻蛉』の写本に接する  
までの状況と伝流の可能性をさぐっている<sup>11</sup>。

また、『枕』との関係については、これもつとに紫式部  
の清少納言への対抗心を指摘する萩谷朴が、反撥し意識す  
ると逆にその影響を受けることを指摘しており、『紫式  
部日記』の冒頭は、『枕草子』の冒頭の影響を受けている

という。<sup>(12)</sup>

それとは別に、『源氏物語』総角の巻、大君の死後の薫が悲嘆する場面に、

ひねもすにながめくらしして、世の人のすさまじきことにいふなるしはすの月夜のくもりなくさしいでたるを、すだれまきあげてみ給へば…… (一六六四頁)<sup>(13)</sup>

という箇所があり、『河海抄』に、

清少納言枕草子、すさまじき物しはすの月、女のけさう。という注記があることは、よく知られている。<sup>(14)</sup>

一方、『更級日記』の作者における紫式部の「影」は第一講でものべたところだが、彼女の作品『寝覚物語』（夜の寝覚）には、『紫式部日記』と関連するとおぼしき箇所が、小学館の日本古典文学全集・新編全集に指摘されている。

『寝覚』の流布本（松平文庫本）の巻五、内大臣（男君）の言のなかに、

……女の御身、たちまちにそむかせ給ても、きはだかに雲にのぼらせたまはざらんかぎりは、この世の御身のかざりとも、をのづからなるやうも侍なん。おまへもこのことゞもの気色をもちきかせたまひながら、「なにか、さらでも」とおぼしとらせをはしまして、まだはるけき御ゆくすゑを、たちまちにやつしたてまつらんとおぼしよらせ給けるにやとも、御けしきたまはら

まほしう侍てなん。……

(四五八頁)<sup>(15)</sup>

とある。巻五に入っても病篤い寝覚の上が出離の思いをつのらせている、という報を聞いた内大臣（男君）が広沢に駆けつけ、過去のふたりの因縁を寝覚の上の父入道に語る場面である。前田本（巻下）もほとんど同文。本文に特に問題はないうだ。

これに対して、『紫式部日記』の、言及されることの少くない一節、いわゆる消息文の結語の部分にこうある。

いかに、いまはこといみし侍らじ。人、といふともか  
くいふとも、ただあみだ仏にたゆみなくきやう（経）  
をならひ侍らむ。世のいとはしきことは、すべて露ば  
かり心もとまらずなりにて侍れば、ひじりにならむに、  
けだい（懈怠）すべうも侍らず。たゞひたみちにそむ  
きても、雲にのらぬほどの、たゆたふべきやうなむ侍  
るべかなる。それに、やすらひ侍るなり。としもはた、  
よきほどになりもてまかる。いたうこれより老いほれ  
て、はためくらうてきやう（経）よまず、心もいとゞ  
たゆさまさり侍らん物を。心ふかき人のまねのやうに  
はべれど、いまはたゞ、かゝるかたのことをぞおもひ  
たまふる。それ、つみふかき人は、またかならずしも  
かなひ侍らじ。さきの世しらるゝ、ことのみおほう侍れ  
ば、よろづにつけてぞかなしく侍る。

(三二五～三二六頁)<sup>(16)</sup>

女性の身の処し方のむずかしさを説き、いつときの激情にかられての出家遁世は時の推移とともにかえって色褪せてしまふという一般論があること、この両者に共通しているというのである。『新編全集』は「女人の出家往生の困難が語られて」おり、『源氏物語』帚木巻にも、「なま浮かびにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬべくぞおほゆる」などとある」ことを指摘し、「女の自覚と男の批判との違いはあるが、内大臣の言葉は表現まで『紫式部日記』に似る」と指摘する<sup>(17)</sup>。現実の紫式部も、晩年ちかくまで宮仕えをつづけたようだし、物語の主人公・寢覚の上も内大臣と子女に伴われて帰京し、一時の平安を得るのである。

第一講でもふれたように、「『源氏物語』からの引歌と指摘される箇所だけでも」『寢覚』には二七例ある。『寢覚』注釈の、たとえば『新編全集』ひとつとつてみても、『源氏』に関する言及や引用の指摘などは、現存本全篇七五箇所におよぶ。物語史における『源氏』と『寢覚』の関係は、ここにことあらためて屢述する必要もあるまい。

### 三 「中の君」の物語

『源氏』の作者と『更級』『寢覚』の作者には作品内の引

用／被引用の関係だけしか考えられないのだろうか。

孝標女の身近には大式三位賢子の存在があり、そして紫式部の『源氏物語』作者としての「生」を孝標女がつよく意識していたであろうことは、前講で先学（津本信博・福家俊幸・久下裕利）の指摘を引きつつ論じたところである。紫式部が果たした名声、その娘の榮譽をまのあたりにするにおよんで、『源氏物語』という作品の「効用」(utility)あるいは (caution) を見いだし、みずからの作品にもそれを求めたのではないか——ということであった。

ところで、紫式部の周辺を知るうえで『紫式部集』にしか得られない情報が少なくないことは、岡一男『源氏物語の基礎的研究』（東京堂出版、一九五四年初版）、今井源衛『紫式部』（吉川弘文館、一九五八年六月初版）、角田文衛『紫式部の身辺』（古代学協会、一九六五年一月刊）、同『若紫抄』（至文堂、一九六八年五月刊）、同『紫式部とその時代』（角川書店、一九六九年五月刊）等々、はやい時期から知られ、評伝に活用されてきた。そのなかでも、家族を知るうえで欠かすことのできない重要な本文が『紫式部集』前半にあつたのである。

あねなりし人なくなり、又人のおと、  
うしなひたるが、かたみにゆきあひて

「なきが、はりにおもひかはさん」といひけり。

ふみのうへに「あねぎみ」とかき、「中の君」

とかきかよはしけるが、をのがじ、とをき

ところへゆきわかるゝに、よそながらわかれ

おしみて

15 きたへゆくかりのつばさにことづてよ

くものうはがきかきたえずして

式部の兄とも弟ともいわれる惟規は『尊卑分脈』はもとより、『今昔物語集』『十訓抄』などの説話に名を残しているが、姉の存在を明記する資料はなかった。『紫式部集』によって、かろうじて姉の存在を確認し得るのである。まさしく紫式部は「中の君」だったことは、彼女自身によって明かされているのである。

一方、『更級』の作者にも姉があることは、その日記の冒頭からすでに明らかであった。

……世中に物語といふ物のあんなるを、いかで見ばやとおもひつゝ、つれづれなるひるま・よひるなどに、あね・まゝ、は、などやうの人々、の、その物がたり、かのものがたり、ひかる源氏のあるやうなど、ところ々かたるをきくに、いとゞゆかしさまされど……

(二七九頁)<sup>(18)</sup>

という、引かれることの多い書き出し直後の一節があり、また、「万寿元年（一一〇二四）歟」（定家自筆本傍書）とあ

る記事の、

その五月のついたちに、あねなる人、こうみてなくなりぬ。よそのことだに、おきなくよりいみじくあはれと思わたるに、ましていはむ方なく、あはれかなしとおもひなげかる。……

(三〇五頁)

もまたよく知られるところである。これも複数の女きょうだいの記録を見出せぬことによれば、『更級』の作者も紫式部と同様「中の君」であったであろう。

とすれば、はたして孝標女は紫式部の境遇についてどれほどの知識があったのであろうか。あったとも見えるし、なかったともいえよう。「系図」における二人の距離からだけでは、読み解くのは至難のわざである。

しかし、二人の作品には、姉妹の存在を基底として、おどろくほどの共通点がある。

『寝覚物語』（夜の寝覚）における主人公・中の君、そしてその先蹤として『源氏物語』宇治姉妹の中の君のふたりをならべるまえに、後者にひそやかに顕現している例があった。「源氏物語と寝覚物語」という命題のもとに、あえて永井和子が選択した「花散里と中君」という見立てである。<sup>(19)</sup>

花散里は、桐壺帝の麗景殿女御の妹であり、ほんらいの

「花散里」とは桐壺院の崩後の女御の住まいに擬せられていたとおぼしいのが、物語の構想の進展によつてその妹に比重が移し替えられたとするのが『源氏物語』構想論のあらましである。<sup>20</sup> 永井の表現を借りれば、花散里は「登場する巻も回数も多いのにもかかわらず、さしてこれという個人的な物語を形成するわけでもなくて、捉えにくい人物」に見える。しかし、むしろ光源氏の家庭のなかで「主婦」「妻」としての側面が強調されているところに存在意義があり、「なくてもよい、よう、な女」であるかもしれないが、『なくともよい女』では決してない」という（傍点永井）。と同時に、「妻」としての存在、「主婦」としての力を發揮する『寢覚』の中の君という存在と花散里とを結びつける機縁があるともいう。

ただし、中の君像が花散里の影をそのまま負うものではなく、このふたりの共通性は物語の展開と帰結による「結果的な一致」である、と永井は結論づける。その意見はたしかに納得のゆくものではあるが、「さしてこれという個人的な物語を形成するわけでもな」い人物が「登場する巻も回数も多」く、それでいて「捉えにくい」とはどういうことなのか、花散里の存在自体の問題はこのような『源氏』構想論のなかで決着がついているわけではない。

ここで、もうひとつ、花散里が「中の君」でもあったこ

とを議論の材料として強調しておこう。この人物が物語のなかで類例がなく、源氏の妾妻のなかで紫の上・明石の君とともに重要な役割をもたせたところに「作者の強い執心」を読みとる意見が森本元子にあった。<sup>21</sup>

『源氏物語』の「中の君」といえば宇治の八の宮の次女が代表されるが、「宇治のゆかり」の女性たちのなかで、大君から浮舟への中継ぎの位置にあつて、

いとさかりに匂おほくおはする人（中の君）の、さま／＼の御物おもひにすこしうちおもやせ給へるしも、いとあてになまめかしきけしきまさりて、むかし人（大君）にもおほえたまへり。ならばいたまへりしおりは、とり／＼にて、さらに似たまへりともみえざりしを、うちわすれては、ふとそれかとおぼゆるまでかよひ給へるを……（早蕨、一六七八頁）

と大君の身代わりに擬せられながらも、「似たりとのたまふゆかり」（宿木、一七五五頁）＝浮舟の登場によつて、あつさり」と「ゆかり」の地位を譲り渡してしまふ。近年にいたつてこそ『源氏』における宇治の中の君の重みは確認されてはいるものの、「ゆかり」の物語における不徹底さは否定しようもなかった。

ところが、榎本正純によつて、次のような問題提起がされて以来、中の君像は一変しつつあるといつてよい。<sup>22</sup>



紫式部集を繙いて著しく目につく一つに〈憂き世〉〈憂き身〉感がこいことがあげられるが、……いまだ君、中君、浮舟がそれぞれ〈憂き世〉〈憂き身〉意識をどの程度もつていたか調べてみる。大君（五）、中君（一三）、浮舟（九）である。最も悲劇性の薄い、〈幸い人〉とも目されてきた中君にこのように多く見られることはけだし注目に値する。これまで特に注目されることがなかったが、この事實は、中君も作者紫式部の影響下にあつたことを予測させると同時に家集との連関を中心に中君を考察しようとする本稿の立場を側面より支持するものであろう。

——と。たとえば、宿木の巻、匂宮が夕霧の六の君に婿取られた後、訪問した薫に中の君が宇治に帰ることを懇望する場面、

ことさらびてしもてなさぬに、露をおとさで、もたまへりけるよ、と、おかしくみゆるに、をきながらから、けしきなれば、

（中の君）「きえぬまにかれぬる花（朝顔）のはかなさにおくる、露はなほぞまされる

なにか、れる」といとしのびて……（二七一―九頁）  
これと『紫式部集』の、夫・宣孝と死別したころの歌とさ  
れている一首、

世中のさはがしきころ、あさがほ  
を人のもとへやるとて

52 きえぬまの身をもしるく、あさがほの

つゆとあらずふ世をなげくかな

とが「発想の一致が顕著」という。そして、『源氏』と『紫式部集』の類似例をつぎつぎとあげてゆき、「中君と作者との〈同質性〉、その内的状況の緊密な結びつき」があり、中君と作者紫式部と精神的に近距離にあり、中君を形象していく過程において作者は自らをかの女に重ね合わせていたのではないか……

と指摘する。つまり、「中君像は現実の作者紫式部自身の生の内面化にはかならず、作者は物語世界の現実に根差した生を中君に辿らせたのだ」——と。岩佐美代子は、これに対して、中の君の性格は「長女的な思慮深さによって洗練された次女的な大胆さ……紫式部自身の生の内面化を見る」と全面的に賛同した。<sup>(23)</sup>

さて、『更級』の作者にも姉があつたことは右にのべた。

『更級日記』のなかには夕顔・浮舟などの名を見出すが、宇治の中の君に対する言及は見られない。紫式部の境遇についてもどれほどの知識があつたか不明といったばかりである。しかし一方、孝標女作とされる『寢覚』が「中の君の物語」であることは周知のとおりである。

『源氏』の宇治の姉妹、『寢覚』『浜松中納言物語』の姉妹をあげて、同母の姉妹が「明暗を分けるような境遇を語られる例」「宿命の相違への関心が創作のエネルギートなつて」と読みとる鈴木紀子の意見もある。<sup>24)</sup> 現存本『寢覚』の、特に、いわゆる第一部を見るかぎり、大君・中の君（寢覚の上）の皮肉な隣り合わせの宿命を思いみることもできようが、龐大な欠巻部を補填すれば、両者の比重はまったく均衡のとれたものではない。かつて存在したはずの完成版ももとより、現存形態の『寢覚』もまた「中の君の物語」たるゆえんである。旧著『女の物語』のながれ——古代後期小説史論（加藤中道館、一九九四年一〇月）、『円環としての源氏物語』（新典社、一九九九年五月刊）の参照を乞うて、いまは重複を避けたい。

『寢覚物語』の中の君は、現存松平本の巻二と巻三の間の中間欠巻部とよばれる部分で、姉大君の死後、その子小姫君を引き取り、みずからの子とともに養育する。これが『更級』の作者本人の事跡と重なりあうことはよく知られている。

その五月のついたちに、あねなる人、こ（子）うみて  
なくなりぬ。……かたみにとまりたるおさなき人、く  
を、左右にふせたるに、あれたるいたやのひまより月  
のもりきて、ちごのかほにあたりたるが、いとゆ、し

くおほゆれば、そでをうちおほひて、いまひとりもか  
きよせて思ぞいみじきや。 (三〇五頁)

『寢覚』の本文が欠けているので直接の比較ができないのは残念であるが、作者の体験がそのまま生かされているとおぼしき箇所である。

紫式部の場合、姉が結婚していたかどうかわからないが、おそらく遺児と臥所をともにしたとする『更級』の作者とは異なる境遇であったと想像される。しかし、ともに姉をもち、はやく姉に先立たれ、その後本人は物語の世界で生きようとした、という共通面は動かし方がない。ふたたびみたび、孝標女の紫式部周辺への視線が気になるところである。

ここで、本「講義」の端緒となった廣田收の著書のひとつ『講義 日本物語文学小史』第一講「日本物語文学史の方法論」の一節をもう一度引いておきたい。

そもそも、古典においてひとつの作品textが、他の作品から影響を受けたということを、どのようにして証明できるでしょうか。私はひそかに、textと「文」との間に共有される構造があれば、それは直接かどうかは別として、伝播や影響のあったことの証明だと思っています。<sup>25)</sup>

重要な指摘として服膺<sup>ふくよう</sup>しておきたい。そして、もう一度、

「影響」というものの解明が一筋縄ではゆかないこと、内部構造や物語本文などの作品相互で指摘できるものばかりではない場合もあることを確認すべきだと思ふのである。記号論・テキスト論が導入されて以来、作品の理解に作者自身を持ち出すことは、すっかり流行<sup>はや</sup>らなくなってしまうが、そのために見えなくなってしまう欠落が大きい、大きすぎる、と稿者は考えている。

これも第一講のくりかえしになるが、あえていつておきたい。作品を生み出した作者自身、あるいはその作者の立場への関心というかたちでの「影響」という問題もありえたのである。

## 注

(1) 横井「『寢覚』の風景——「広沢の池のわたり」」(永井和子編『源氏物語へ 源氏物語から——中古文学研究24の証言』(笠間書院、二〇〇七年九月刊)所収。のち横井『源氏物語の風景』(武蔵野書院、二〇一三年五月刊)に第五篇第三章として所収)。

(2) 岡一男『源氏物語の基礎的研究』(東京堂出版、一九六六年八月刊)では橘為義とされ、角田文衛「紫式部の伯母と従姉」(『紫式部とその時代』角川書店、一九六六年五月刊、所収)で平維将が比定され、それを承けた岡一男

が「紫式部の生涯」(『源氏物語講座・第6巻・作者と時代』有精堂、一九七一年二月刊、所収)で平維時に修正し、現在の定説となっている。

(3) 『左経記』長元元年八月五日条、『小右記』長元二年二月二三日条、同三年五月一四日条、『小記目録』同三年七月八日条。平忠常の乱の概略については「『更級日記』孝標をめぐる風景——その大いなる「凡庸」について」(福家俊幸・久下裕利編『王朝女流日記を考える——追憶の風景』武蔵野書院、二〇一一年一月刊、所収。のち『源氏物語の風景』に第五篇第二章として所収)に述べた。

(4) 『紫式部集』本文は、ことわらないかぎり実践女子大学本による。久保田孝夫・廣田収・横井孝編著『紫式部集大成』(笠間書院、二〇〇八年五月刊)参照。

(5) 清水好子『紫式部』(岩波書店、一九七三年四月刊)、九〇—一〇頁。

(6) 『小右記』長和三年二月七日条。

(7) 森公章『古代豪族と武士の誕生』(吉川弘文館、二〇一三年一月刊)、一九三頁。

(8) 横井、前掲注(3)稿。維時・直方父子周辺の一族について、別稿で論じたい。

(9) 木村正中『源氏物語と蜻蛉日記』(學燈社『国文学』一九六一年四月)以下、「蜻蛉日記の源氏物語への影響」

についての七編の論はすべて『中古文学論集 第五卷（源氏物語・枕草子他）』（おうふう、二〇〇二年三月刊）に集約されている。

- (10) 上村悦子「源氏物語と蜻蛉日記」（『源氏物語と女流日記 研究と資料——古代文学論叢第五輯』武蔵野書院、一九七六年一月刊、所収）、一七三頁。

- (11) 坂本共展「紫式部と『蜻蛉日記』」（『源氏物語と日記文学 研究と資料——古代文学論叢第十二輯』武蔵野書院、一九九二年二月刊、所収）

- (12) 萩谷朴「枕草子を意識しすぎている紫式部日記——反撥による近似、比較文学の一命題」（『創立九〇周年記念 二松学舎大学論集』昭和四二年度、一九六八年三月）、同『紫式部日記全注釈・上巻』（角川書店、一九七一年一月）三二頁。

- (13) 『源氏物語』本文は明融本により、『源氏物語大成』でその所在の頁数をしめた。

- (14) 天理図書館本による。山本・石田校訂『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年三月刊）、五六七頁。ただし、この一文、現存『枕』には見えない。現存三巻本「すさまじきもの」末尾には「しはすのつごもりの長雨」とある。

- (15) 『寝覚物語』本文は松平文庫本により、『新編日本古典文学全集』でその所在の頁数をしめた。

- (16) 『紫式部日記』本文は岩波・新日本古典文学大系により、その所在の頁数を明示した。ただし、黒川本・松平文庫本などを参照し、表記に私意をもちいた。

- (17) 小学館・新編日本古典文学全集『夜の寝覚』四五八頁頭注。  
(18) 『更級日記』本文は定家自筆本により、『新編日本古典文学全集』でその所在をしめた。

- (19) 永井和子「源氏物語と寝覚物語——花散里と中君」（『続寝覚物語の研究』笠間書院、一九九〇年九月刊、所収）。  
(20) 藤村潔「花散里の場合」（『源氏物語の構造』桜楓社、一九六六年一月刊、所収）。

- (21) 森本元子「花散里」（源氏物語講座2『物語を織りなす人々』勉誠社、一九九一年九月刊、所収）。

- (22) 榎本正純「物語と家集——宇治十帖中君の再検討」（『国語と国文学』一九七四年七月）。なお、榎本のあげる実例は、現今の研究状況を鑑み、本稿の文脈に即して『源氏』は明融本、『紫式部集』は実践女子大学の本文に置き換えた。

- (23) 岩佐美代子「宇治の中君——紫式部の人物造型」（『源氏物語六講』岩波書店、二〇〇二年二月刊、所収）、一六八頁。  
(24) 鈴木紀子「夜の寝覚」『浜松中納言物語』の作者の関心——「姉妹」の宿命」（『京都橘女子大学研究紀要』第二二号、一九九五年二月）、「夜の寝覚」と『源氏物語』

宇治の姉妹——同母姉妹への関心」(片桐洋一編『王朝文学の本質と変容 散文篇』和泉書院、二〇〇一年一月刊、所収)。

(25) 廣田收『講義 日本物語文学小史』(金壽堂出版、二〇〇九年一〇月刊)、八頁。

(よこい たかし・実践女子大学教授)